
遊戯王 G X に転生したのかな？

カイバーマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GXに転生したのかな？

【Nコード】

N1830Z

【作者名】

カイバーマン

【あらすじ】

一応転生ものを書くつもりです。

初めてなので色々ミスがあると思いますが暖かい目で見守ってください。

ブログ（前書き）

初めての投稿です。一応。一回ミスったので事実上二回目ですが。楽しんでいただければ嬉しいです。では。

プロローグ

目を覚ましたら見覚えの無い天井が見えた。

「あれ？このテンプレはまさか？」

「まさかつてなんだい？」

声のする方をふりかえると、ちっちゃい女の子がいた。

「まさか、神様の手違いで俺が死んでせめてものお詫びに別の世界に転生させてあげるよ。とかじゃないよね？」

嫌味っぽく綺麗な笑顔で聞いてあげた。

すると幼女さんは冷や汗をダラダラかきはじめた。

うん。どうやら図星らしい。でもせつかくなのでもうちよつと弄ってみる。

「そんでもって君がその神様だなんて馬鹿みたいなことないよね？」

幼女は汗だくというか、もはやナイアガラのごとくだ。
やつと神様？がしゃべりはじめた。

「すまんのじゃ〜。許してほしいのじゃ〜」

すげえ。初めて見た。神様の土下座。こんなの見たことあるのこの世で俺だけなんじゃなかるうか。あ、この世じゃないのか。

それにしても幼女が涙目で土下座つてすごく罪悪感があるじゃないか。でも弄るのはやめない。楽しいから。

「へー。やっぱり君のせいなんだ〜。でもさあ謝ってすむ話じゃないよね。」

やべえ。幼女マジ泣きだ。さすがにやりすぎたかな？でも謝らない。外道？なんとでも言え。俺は以外と苛ついているんだ。

「まあいいや。んで俺はどこに行くの？」

「許してくれるのか？」

「はあ？」

「はい。ごめんなさい。お主が行くのは遊戯王GXの世界じゃ。」

「ふーん。んで特典は？」

「特典？」

「ドロー力アップとかカード一式とかさあ。何かしらあるでしょ？」

「ならば何時でも神様に相談出来るとかはとうじゃ？」

「ミスで人を殺すようなドジっ娘に相談するほど落ちぶれてねーよ。」

「むぐう。なら何が良いのだ？三つまでならかなえてやるぞ？」

「ナメック星人かよ。じゃあまず一つ目。昔、俺が住んでた世界に存在するカードを全部GXの世界に送ること。」

「了解じゃ。」

「二つ目向こうの生活で困らない程度のものをくれ。」

「それはさっきのカードと一緒にいいぞ？」

「おお。中々のサービス精神だね。ミスを許す気は無いけど。」

「むぐうう。まあ良い。二つ目は？」

「二つ目は精霊を見えるようにすること。」

「了解じゃ。」

「じゃあ最後、向こうの世界に行ったら俺に一切干渉しないこと。」

「どういうことじゃ？」

「要は向こうの世界で俺に関わるなってこと。話かけたり夢に出てきたりとかするなってこと。」

「お主はワシのことが嫌いなのか？」

「やべえ。今回ののはさすがに弄るとかそういうレベルじゃねえ。本気でショックを受けてるっばい。一応フォローくらい入れとくか。」

「違うって。結構元の世界で色んな人に迷惑かけたから、第二の人生くらい他人に迷惑かけたくないんだ。」

「分かったのじゃ。そういうことなら仕方がない。」

「じゃあ向こうの世界に送るぞ。」

「ああ。分かった。」

「じゃあ目をつぶれ。」

俺の意識はそこで無くなった。

プロローグ（後書き）

かなり自分的には長くかいたつもりです。ミスなどがあつたら指摘してください。お願いします。

第一話　おい、デュエルしろよ（前書き）

こんな超展開に誰がした！まあ僕なんですけどね。
登場人物のしゃべり方がおかしいかも？

まあとりあえず読んでくれたら嬉しいです。
では。

第一話　おい、デュエルしろよ

「ここはどこ？私はだれ？…なんてネタやってる場合じゃなかった
」

ふざけてると背後から声が聞こえた。

「おい。ガキがこんな時間にこんなところでなにをしている！」

あれえ？まさか生活できるものって刑務所とかじゃないよね？

　数時間後

「どうした？早くディスクを構えろ。」

あれえなんでいきなりデュエルなの？まあしゃあない。とりあえず使っても問題なさそうなデッキをださないと。うん。これでいいかな？

「あのー一つ聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「なんでデュエルするんすか？」

「仕方ない。説明しよう。」

「説明開始」

「社長！社内を歩き回っていた子供を確保しました。」

「そんなガキ、追い出すか親を呼び出せばいいだろう！下らんことで俺を呼ぶな！」

「ですが社長。その子供の持ち物のなかにこれが…」

「なんだ！……こっこれは！！まさか、そんなことありえん！！」

「調べたところコピーカードということでもなさそうです。」

「そのガキをデュエル場に連れてこい！」

「了解しました！」

という訳だ。

「わかりました。」

「おっと。使うデッキはこっちで指定させてもらつぞ。」

「えっ!?!」

「貴様も使っただろう。青眼の白龍を!!」

やばいつて。問題が起こりそうだから使わないでおこうと思ったのに…

「わかりました。ただし条件があります。」

「なんだ。言ってみろ。」

「俺が負けた場合すべて説明して帰ります。俺が勝った場合、俺の住む場所を提供してください。もちろん事情は正直に話します。」

「よかるう。ふんっ貴様が俺に勝つなど不可能だからな。」

よし。まさかこの賭けに乗ってくれるとは思わなかったがラッキーだぜ。

「じゃあいきますよ!」

「「デュエル!!!」」

「先行は貴様に譲ろう。」

「じゃあ遠慮なく。ドロー!」

手札6枚

「俺は未来融合フューチャー・フュージョンを発動！対象はF・G・D！デッキからミンゲイドラゴン2体と青眼の白龍、そして伝説の白石2体を墓地に送ります。」

「ふん。墓地のカードが増えただけではないか。」

「さらに伝説の白石の効果を発動！」

「このタイミングで発動する効果だと！？」

「このカードが墓地に送られたときデッキから青眼の白龍を手札に加えます。さらに古のルールを発動！手札のレベル5以上の通常モンスターを特殊召喚します。現れる！青眼の白龍！」

「グオオオオオオ！！！」

うおーソリッドビジョンすげえええ！！！！

「カードを二枚伏せてターンエンド！」

場

青眼の白龍

未来融合フューチャー・フュージョン

伏せカード2枚

手札3枚

「俺のターン！！ドロー！」

海馬

手札6枚

「俺は正義の味方カイバーマンを召喚！」

ちよwwwおまwww社長がカイバーマンってwww

「カイバーマンを生贄に青眼の白龍を特殊召喚！さらに魔法カード滅びの爆裂疾風弾を発動！貴様のモンスターを全て破壊する！さらにブラッド・ヴォルスを攻撃表示で召喚！」

「バトル！ブラッド・ヴォルスでダイレクトアタック！」

「そうはさせない！畏カード発動！正統なる血統。蘇れ！青眼の白龍！」

「くっ。カードを一枚伏せターンエンドだ。」

「エンドフェイズ時、速攻魔法サイクロン。伏せカードを破壊！」

「くっ（俺の収縮が！）」

海馬

場

青眼の白龍

ブラッド・ヴォルス

手札2枚

「俺のターン！…ドロー！」

手札4枚

「魔法カード発動！手札断殺！お互い手札を2枚墓地に送り二枚ドローする！」

手札3枚

海馬

手札2枚

「海馬さん。このターンで決めます！」

「なっなに！？」

「魔法カード発動！滅びの爆裂疾風弾！海馬さんのモンスターを全て破壊する！」

「なんだと！？しかし貴様の青眼の白龍は攻撃することは出きんぞ！次のターンで逆転してやる！」

「言いましたよね。このターンがラストターンだ！！魔法カード発動！竜の鏡！墓地の青眼を3体除外し、現れる！青眼の究極竜！」

「バトル！！青眼の究極竜でダイレクトアタック！！アルティメット・バースト！！！」

「うわああああ！」

海馬

L P O

「ありがとうございました。」

「ふん。約束通り住居は用意してやる。ただし納得のいく説明をし

る。」

「はい。」

「とりあえず今日は社員の部屋を貸してやる。話は明日の朝だ。」

「わかりました。では。」

第一話　おい、デュエルしろよ（後書き）

なんでこんな事にしちゃったんだろう？

続きが作りにくいじゃないか。ぶんぶん。

はい。自己責任です。すいません。

こんな駄文でも感想などをいただければ嬉しいです。では次話で。

第二話〜住む場所ゲットだぜ！〜（前書き）

今回はデュエル無しの回です。ちなみに今後アニメ版とOCGで効果の違うカード（天よりの宝札など）は基本OCGに準じます。アニメ版効果の場合後書きに書くつもりです。

第二話　住む場所ゲットだぜ！

「うおっ、すげえ。」

案内されたのは高級ホテルのような部屋だった。

窓の外に青眼が描いてあったり、青眼の銅像が置いてあったり社長の趣味全開だな。

「こんな部屋に来たらアレをやるしか無いでしょ。」
軽く助走をつけて俺はベッドに飛びこんだ。

「うわぁ、めっちゃ柔らかい。」

「では、明日の朝迎えに来ますので。」

やべえ、めっちゃ恥ずかしい。案内係らしきお姉さんに苦笑されたよ。とりあえず何かしら返事しなきゃ。

「わかりました。ありがとうございます。」

お姉さんは優しい微笑みを残していった。

あれは好意じゃないな。絶対。弟を見守る目だ。

元々あのお姉さんよりおそらく年上だっただけに、余計恥ずかしい。

「とりあえず寝よう。」

く朝になってく

「コンコン」「コンコン」

うるさいなあ。いいや、また寝よ。

「コンコン」

しばらく無視して寝ていたらノックが止まった。
よし、勝ったぞ。

「ガチャッ」

ん？なんだ今の音。まあいいや。寝よ。

「起きてください。」

頭を揺さぶるなあ！仕方ない起きるか。

「????」

「何ですか？」

ちよつと待った。頭を整理しよう。

朝、目覚めたら目の前に美女がいる。

OK状況は把握した。

夢だ。そう考え俺は意識を手放した。

「寝ないでくださいってば、おい。」

「しょうがないなあ。」

「うひゃあ!?!」

「あつ、起きました?」

うん。夢じゃないらしい。ということは数センチ前にあるこの美人さんの顔は…

「とりあえず離れようか。」

「あつ、はい。わかりました。」

やっと分かった。昨日の案内係さんだ。

「っていつか、どうやって起こした？」

「いえ。特に何も。」

すげえ目が泳いでる。ここはこのセリフだろ。

「異議あり！！証人ポッケから出ている猫じゃらしは何ですか！」

「きゃああ！って某裁判ごっこしてる場合じゃありません！社長がお待ちです。」

やべえ。社長怒らせたら何が起きるか分かんねえぞ。

「すみません。ってあれ？」

「何ですか？」

「昨日は気にしなかったけどお姉さん身長いくつくらいですか？」

「一応平均くらいですけど？それが何か？」

「すみません。鏡貸してもらえますか？」

「…？どつぞ。」

鏡に映ったのは、少年の顔だった。

「ちっちゃくなってるう！」

「何がですか？」

「何でもないです。気にしないでください。」

「分かりました。では社長室へ。」

〈社長室〉

「この俺を待たせるとはいい度胸だな。」

目茶苦茶怒ってますやん。助けて、お姉さん。
あつ逃げてる。いつの間に！この裏切り者！

「人の話を聞いているのか！！」

「すみません。本当すみません。」

「ふん、まあいいだろう。さあとりあえず貴様の身の上話を聞いて

やる。」

面倒くさそうな声だけど目はきらきらしてる。無駄に高等技術だ。

〈説明開始〉

〈説明終了〉

「ふん。異世界からきたなど到底信じられんが。まあ本当なのだろう。青眼が良い証拠だ。」

「ありがとうございます。」

さすが社長、話の分かる奴だ。

「でも俺が外で青眼使ったら問題になりませんか？」

「ふん。その点に関しては俺が何とかしておこう。」

社長めっちゃいい人ですよん。

「ところで家はどうすれば？」

「アパートを用意してやったしばらくはそこで暮らすがいい。家具くらいは用意しておいてやる。」

「あのく大変申し訳無いのですが働き先を用意してくれませんか？」

「子供が働けるようなぬるい場所、ここにはない。生活費の仕送りをしてやる。」

「いやいや。ただでそこまでして貰うわけには行きませんよ。」

「何を勘違いしている。ただのわけなからう！」

「ですよ」

「貴様の世界にあったというカードを作らせてもらっ。」

「えっ？それだけ？」

「さらにそのカードを踏まえた禁止制限リストを作るのに協力してもらっ。」

「分かりました。ありがとうございました。」

「今更だが貴様の名前を聞いておこっ。」

「本当に今更ですね。」

「うるさい！早く答える！」

「俺の名前は杉崎美咲です。」

「杉崎ミサキか。どんな字だ？」

「美しく咲くで美咲です。」

「貴様が美しく咲くで美咲だと女のような名前だな。」

「まあ両親が名付けたので何を考えて付けたのかわかりませんがね。」

「まあいい。アパートの住所はこれだ。カードは1ヶ月ほど預からせてもらうがいいな？」

「はい。」

「貴様と連絡が取れるようこれも渡しておこう。」

「ありがとうございます。」

そして俺はアパートに向かった。

社長もある程度の常識はあるのか、そんなに大きくない言っちゃえば普通のアパートだった。

「よかった。さすがに海馬コーポレーションの部屋みたいな部屋だったら落ち着いて暮らせないもんな。」

俺はそこではらく普通の日々を過ごしたのだった。

第二話く住む場所ゲットだぜーく（後書き）

どうでしょうか。文章がおかしかったり誤字脱字などありましたら教えてください。

プロフィール（前書き）

前回投稿したのをちょっと直しました。

プロフィール

杉崎美咲

12歳（戸籍上）

23歳の時に転生。気づいたら12歳くらいのサイズになっていた。

特徴

精神的に人をいじめるのが好き。

恩や義理は必ず返す。

恩を受けた人を悪く言われたりするとキレる。

自分の気に入らない奴にたいしてはとことん外道。

元々の世界ではシンクロは使うがエクシースは使わなかった。

どちらかというとファンデッキが好き。

顔立ちは女の子っぽい。俗に言う男の娘。

使用デッキは不特定。やたらデッキを作る癖がある。

プロフィール（後書き）

明日か明後日くらいには更新するつもりです。

第四話 アカデミア受験なう (前書き)

すいません。前回の投稿がおかしなことになっていたので直しました。

本文の削除だけでこんなに時間がかかるとは自分の機械音痴っぷりに驚きです。

第四話　アカデミア受験なう

転生から半年たって、禁止制限リストがやっと完成した。

要は2011年9月の禁止制限から強欲な壺と天使の施しを制限に落として、天よりの宝札とかのアニメ版チートカードを制限にしただけ。

時間がかかった原因は強欲な壺と天使の施し。社長が禁止化を激しく拒否ったから。

シンクロ関連のカードは言わないでおいた。だって元の世界みたいな「ワンキル？よくあるよくある。」何てことになったら楽しめないじゃん。

DDDBとか。DDDBとか。黒羽とか。

俺は数少ないファンデッキ使いなの。

代行とか真六とかクジャドとかマジ勘弁。

そのあとは割と普通だった。

変わったことといえば、海馬とデュエルして勝つ度に一つだけお願いを聞いてもらえるっていう、アンティデュエルをしたことくらい。デュエルに勝って良かった。社長の生エネコンとか中々聞けないぜ？

まあそんなこんなで3年間過ごしてました。

～三年後～

「明日は寝過ごすな。デュエルアカデミアの試験だからな。」

「は？もう」

「あれだけ金を出してやったのだ。宣伝くらいしてもらわんとな。」

「分かりましたよ。その件を出されたら断れないですもんね。」

ということでは俺はデュエルアカデミアに通うことになった。てか受かること前提で話してるな。落ちる気無いけど。

〈実技試験〉

受験番号3番、デュエル場に来なさい。

「こんにちは。試験官の茂部だ。全力でかかって来なさい。」

おいおい名前からしてモブキャラの鏡だな。

「ここに3つのデッキがあります。どれを使うか迷っているのですね。あなたが決めて下さい。」

「一つ目、ほぼ確実に勝てるけど使う方も使われる方も見てる方もつまらないデッキ。」

「二つ目、勝率は低いけど使われる方も使う方も見てる方も楽しめるデッキ。」

「三つ目、勝率は微妙で使ってる方は楽しいけど使われる方からするとあげつないデッキ。」

「いくら筆記が良かったからといって調子に乗りすぎじゃないか？
一つ目の最も強いデッキでくるといい。」

「分かりました。先行はあなたからどうぞ？」

「舐めてかかるみたいな目にあうぞ？私のターン！」

茂部 手札6枚

「私は重装武者ーベン・ケイを攻撃表示で召喚！」

『重装武者ーベン・ケイ』

ATK500

効果「このカードは通常の攻撃に加え、このカードに装備されたカードの枚数分攻撃することができる。」

「更に私はデーモンの斧2枚と魔導師の力を2枚そして団結の力を装備！」

重装武者ーベン・ケイ

ATK500 ↓ 8300

「あの馬鹿！苛立って試験用デッキじゃないデッキを使ったね！」

試験官のリーダーらしき人が何か叫んでる。周りの受験生があいつ

終わったとか言ってるけど無視無視。

「じゃあ俺のターン。」

手札6枚

「俺は王立魔法図書館を守備表示で召喚。装備魔法折れ竹光を装備。

」

王立魔法図書館

DEF2000

自分または相手プレイヤーが魔法カードを発動する度このカードに魔力カウンターを1つ乗せる。(最大3つまで)このカードに乗った魔力カウンターを3つ取り除くことでカードを1枚ドロースする。

折れ竹光

装備魔法

装備モンスターの攻撃力を0ポイントアップする。

「はっ、そんな装備カード何の役に立つ。」

「うるさい。何も無いなら黙ってる。」

「更に成金ゴブリンを2枚発動。合計で2枚ドロしお前は2000ポイント回復。」

王立魔法図書館

魔力カウンター3

「王立魔法図書館の効果で1枚ドロ。」

王立魔法図書館

魔力カウンター0

「トウーンのもくじを発動。効果によりトウーンと名のついたカードを手札に加える。もくじをサーチ。もくじを発動。もくじをサーチ。もくじを発動。ブルーアイズ・トウーン・ドラゴンを手札に加える。」

王立魔法図書館

魔力カウンター3

「図書館の効果で1枚ドロ」

「数十分後」

「さつきからドロばかりで勝つ気はあるのか！お前のデッキは後1枚しか無いじゃないか！」

「これで最後ですよ。魔法図書館の効果で1枚ドロ。はい、俺の勝ち。」

「何を言っている？私のライフは10000もあるぞ！」

「だから勝ちですって。はい。エクゾディア。」

「こんなのデュエルじゃない！認めん！」

「は？ルールですよ？そんなに不満なら海馬コーポレーションに抗議すればいいでしょう？」

「ぐぬう。もう戻りなさい。結果は後日送ります！」

「負け犬の遠吠えですね。」

「なんだと！！」

「おお怖い怖い。さよなら」

帰ろうとしたところでシロノスに止められた。

「他の生徒のデュエルを見ておくノーモ、大切な勉強なノーネ。観客席で待つてるノーネ。」

「あいにくですが、あの程度のデュエル見るほどの物でもありません。」

「ペペロンチーノ！？あの程度とは随分と余裕があるノーネ？」

「まあ試験官のベン・ケイワンキルにワンキルしましたからね。」

「ならば私とデュエルするノーネ！試験官に勝ったというデッキを見せてみるノーネ！」

「分かりましたよ。」

「「決闘！！」」

「先行はセニョーラに譲るノーネ。」

「俺は男なんですけど。」

久しぶりにイラッとしたぜ！

ドロー！ドロー！ドロー！ドロー！以下略！

「なんなノーネ。対戦相手いないノーネ。」

「なら別のデッキでやってやるよ。」

「「決闘！！」」

「私の先攻なノーネ！ドローニョ！」

「カードを2枚伏せて大嵐を発動するノーネ！」

「私の伏せカードは黄金の邪神像！さらに二体のトークンを生贄に古代の歯車巨人を召喚するノーネ！カードを2枚伏せてターンエンドなノーネ！（私の伏せカードはミラーフォースと攻撃の無力化。攻撃してきたーらミラーフォースで返り討ちなノーネ。）」

古代の歯車巨人

ATK3000

効果：このカードは特殊召喚できない。このカードが攻撃する場合、相手は魔法、罠カードを発動することができない。このカードが攻撃した時、このカードの攻撃力が守備表示モンスターの守備力を超

えている時その数値分相手プレイヤーに戦闘ダメージを与える。(今後、貫通能力と呼ぶ)

クロノス

手札0枚

場

古代の歯車巨人

伏せカード2枚

「俺のターン！カードを2枚伏せ、歯車街を発動！さらにフィールド魔法を伏せる。」

「プレイミスなノーネ。せっかくのフィールド魔法が破壊されてしまふノーネ。」

「歯車街の効果発動！このカードが破壊された時デッキ、手札、墓地のいずれかから古代の歯車と名のついたカードを特殊召喚することが出来る！」

「なんですーと！？しかし、古代の歯車の上級モンスターは特殊召喚できないという制約を持っているはずなノーネ！」

「俺はデッキから古代の歯車巨竜を特殊召喚！」

古代の歯車巨竜

ATK3000

効果

このカードは以下のモンスターを生贄に召喚した場合次の効果を得る
グリーンガジェット

このカードは貫通能力を得る。

レッドガジェット

このカードが相手プレイヤーに戦闘ダメージを与えた時、相手プレイヤーに400ポイントのダメージを与える。

イエローガジェット

このカードが相手モンスターを戦闘によって破壊した時、相手プレイヤーに600ポイントのダメージを与える。

「なんなのーね！？そんな古代の歯車いないはずなノーネ！それに何故あなたが古代の歯車を持っているノーネ！？」

「そりゃあ未発売のカードですしね。何故持っているかは、あなたが勝ったら教えてあげますよ。」

「さらに伏せカード発動！歯車街！さらに大嵐！2体目の巨竜と黄金の邪神像トークン2体を特殊召喚！」

黄金の邪神像

効果

このカードが破壊された時邪神像トークン（攻守1000）1体を特殊召喚する。

「邪神像トークンを生贄に現れる！古代の歯車巨人！」

ちよつと場の確認。

クロノス

古代の歯車巨人

手札0枚

伏せカード無し

美咲

古代の歯車巨人

古代の歯車巨人

古代の歯車巨竜

手札1枚

伏せカード無し

「私の負けなノーネ。」

「まだまだあ！リミッター解除を発動！機械族モンスターの攻撃力を倍にする！エンドフェイズ時にこの効果を受けたモンスターを破壊するけど関係ねえ！」

「覚悟しろよ！この白塗り野郎！！」

「まつ待つノーネ。勘弁して欲しいノーネ！」

「バトル！古代の歯車巨竜で古代の歯車巨人に攻撃！！アイアンクロー！！」

「何かポケ。ン臭がするノーネ。」

『ズバア！！！』

見事に古代の歯車巨人が真つ二つになった。

「ペペロンチーノ！」

クロノス

LP4000↓1000

「古代の歯車巨竜で直接攻撃！！」

「ペペロンチーノ！私の負けなノーネ！」

クロノス

LP1000 ↓ - 5000

「古代の齒車巨人で直接攻撃！！アルティメット・パウンド！！」

「ペペロンチーノ！！！！オーバーキルなんてひどいノーネ！」
「これで文句ないですよ？アカデミアの実技担当最高責任者をワン
ターンキルしたんですから。他の受験生のデュエルは見なくていい
でしょう？」

「分かったノーネ。勝手にするノーネ。」

こうして俺のアカデミア受験は終わったのだった。

第四話ゝアカデミア受験なうゝ（後書き）

次話は3日以内に投稿するつもりです。

ついでに、すぐく今更感あるけどオシリスOCG化おめでとう！

すぐにデッキを作りました（笑）。

基本的に美咲の使うデッキは作者のマイデッキ（現実、ゲームのどちらかで）なので是非使わせたいのですがストーリー的に無理っぽいです。

では次話でお会いしましょう。

第五話「アカデミア入学」さあフラグを立てよう「」（前書き）

ギリギリ3日以内に間に合いました。

FOOLさん指摘ありがとうございました。

第五話「アカデミア入学」「さあフラグを立てよう」

やってきました。アカデミア。そういえば、俺の同学年に二十代、エーマン、アスリンたちはいるのだろうか？

いない方がめんどくさくなくていいんだけど…

こんなことならテストちゃんと見とけば良かった！

どうでもいいけど周りの生徒の視線がうつとしい。

「これで始業式を終了します。」

やっと校長の話が終わった。校長の話が長いのは世界共通らしい。

「おい、そこのお前！俺とデュエルしてくれ。」

俺に向かって二十代が走ってきた。おいおいそんな無邪気な顔で期待されたら、こう言うしかないじゃないか。

「やだね。」

すると二十代が驚いたような顔をした。

「なんでだよ。決闘者なら売られた決闘から逃げるなよ。」

「ふざけるな。こっちにだって用事つてものがあるんだよ。そもそも逃げてない。結果が分かってるから断っているだけだ。」

「なんだよ。結果がわかるって！」

「俺の1ターン目でお前の負けだ。」

「そこまで言うなら俺と決闘しろ！」

「お前は馬鹿か？それとも老人か？ついさっき言っただけだろ？断るって。」

五十代はぐうつと言ったきり黙りこんでしまった。

これはラッキー。今のうちに寮に行こう。

「皆さんこんにちはなのニャー。私が寮長の大徳寺なのニャー。みなさんこれから「このエビフライうめーぞ！」「ダメっすよアニキ！先生が話してる途中なんすから！」」

「お前は馬鹿か？人の話はちゃんと聞けと教育されなかったのか？それとも耳が遠いのか？このボケ老人が！！」

『バシイイイ』

思いつきりビンタしてやった。

「いってえなあ！何すんだよ！」

「いやいや今のはアニキが悪いつすよ。」

「それにお前もだ。青いの。お前も注意するんなら静かにしろ！お前も迷惑かけた一員だ！」

「そんなこと言ったら君だって大きな声出してるじゃないっすか！」

「お前がぎゃあぎゃああと煩くて周りが迷惑しているのに気づいていないからだ！ボケ！」

『バシイ』

またひっぱたいてやった。涙目で煩いので寮から追い出してやった。そもそも何故俺がレッドなのか。まあわかる。どうせエクゾディアが気に入らなかった茂部が文句をつけたんだろう。

「ま…まあ私が寮長の大徳寺なんだニャー。これからよろしくなのニャー。」

「「「よろしく願いします。」」」

「ではまず自己紹介をしてほしいんだニャー。時計周りに自己紹介して貰うのニャー。」

「丸藤翔つす。これからよろしくつす。」

「遊城十代だ。よろしくな。」

〈省略〉

「杉崎美咲です。これからよろしくお願いします。」

「みんなよろしくなのニャー。今日は自由にしてくれていいのニャー。」

〈歓迎会終了後〉

特にやることもなく部屋に戻って寝ることにした。
丁度人数が合わなかったため俺は一人部屋だ。
俺はベッドに入り意識を手放した。

『ピリリリリ』

しばらく寝ていたらPDAが鳴り響いた。

「なんだよ。」

PDAにメールが来ていたため確認する。

『やあドロップアウトボーイ。君にアカデミアの厳しさを教えてやる。自分の持つ最強のカードを賭けてアンティデュエルだ。0時にブルーのデュエル場に来るがいい。』
めんどくさいので無視することにした。

『ピリリリリ』

「またかよ。」

渋々と言った感じでPDAを確認する。

『まだ来ないのか？まあお前のような女男には恐ろしかったか。すまなかったな。』

はい美咲さん臨界点超えましたよ。

「潰す！」

くデュエル場く

「やっと来たか。女男。」

「御託はいいから早くしろよ。叩き潰してやる。」

「貴様！言わせておけば！」

「決闘！！！」

なんだこれ？手札良すぎるだろ。

「俺のターン！！」

取り巻き

手札6枚

「ゴブリン突撃部隊を召喚！伝説の剣を装備！カードを1枚ふせてターンエンド！」

ゴブリン突撃部隊

ATK2300

DEF0

このカードが戦闘を行ったターンのバトルフェイズ終了時このカードは守備表示になる。

このカードは次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を

変更することができない。

ゴブリン突撃部隊

ATK 2300 ↓ 2600

取り巻き

手札 4 枚

ゴブリン突撃部隊

伝説の剣

「俺のターン！ドロー！」

美咲

手札 6 枚

なあにこれ？ワンキルじゃね？

「六武の門と六武衆の結束 2 枚を発動。」

六武の門

永続魔法

六武衆と名のついたモンスターが召喚・特殊召喚される度に、

このカードに武士道力カウンターを 2 つ置く。

自分フィールド上の武士道力カウンターを任意の個数取り除く事で、
以下の効果を適用する。

2 つ：フィールド上に表側表示で存在する「六武衆」または「紫炎」と名のついた効果モンスター 1 体の攻撃力は、このターンのエンドフェイズ時まで 500 ポイントアップする。

4 つ：自分のデッキ・墓地から「六武衆」と名のついたモンスター 1 体を手札に加える。

6つ：自分の墓地に存在する「紫炎」と名のついた効果モンスター1体を特殊召喚する。

六武衆の結束

永続魔法

「六武衆」と名のついたモンスターが召喚・特殊召喚される度に、このカードに武士道カウンターを1個乗せる（最大2個まで）。

このカードを墓地に送る事で、このカードに乗っている武士道カウンターの数だけ

自分のデッキからカードをドローする。

「増援を発動。六武衆の露払いをサーチ。そのまま召喚。」

六武衆の露払い

ATK1600

自分フィールド上にこのカード以外の「六武衆」と

名のついたモンスターが表側表示で存在する場合に発動する事ができる。

自分フィールド上に存在する「六武衆」と名のついたモンスター1体をリリースする事で、フィールド上に存在するモンスター1体を破壊する。

「六武衆の師範を特殊召喚。」

六武衆の師範

ATK2100

自分フィールド上に「六武衆」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

このカードが相手のカードの効果によって破壊された時、自分の墓地に存在する「六武衆」と名のついたモンスター1体を手

札に加える。

「六武衆の師範」は自分フィールド上に1枚しか表側表示で存在できない。

六武衆の結束2枚 武士道カウンター2つ

六武の門 武士道カウンター4つ

「大將軍 紫炎を特殊召喚。」

大將軍紫炎

ATK2500

自分フィールド上に「六武衆」と名のついたモンスターが2体以上存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手プレイヤーは1ターンに1度しか魔法・罠カードの発動ができない。

このカードが破壊される場合、代わりにこのカード以外の「六武衆」という名のついたモンスターを破壊する事ができる。

「だが俺のゴブリン突撃部隊の攻撃力を超えたモンスターは居ないぜ。」

「六武衆の露払いの効果発動。師範を生贄にゴブリン突撃部隊を破壊。」

「何!?!」

「六武の門の効果を発動六武衆の結束2枚からそれぞれ1つずつ、六武の門から2つ武士道カウンターを取り除くことでデッキから師範をサーチ。師範を特殊召喚。」

「おっ…おい、露払いと紫炎のダイレクトアタックで勝てただろ！
？なんでまたモンスターだしてんだよ！？」

「お前は俺を怒らせた。理由はそれだけだ！六武の門の効果発動！
合計8つの武士道カウンターを取り除くことで紫炎の攻撃力を200
00ポイントアップ！！！」

「やつ…やめる俺が悪かった！だから「バトル！！！！！」」

「露払いと師範で攻撃！！！」

取り巻き

LP4000↓300

「とどめだああ！！！！紫炎でダイレクトアタック！！！」

LP300↓4200

「おっ…おぼえてろお！」

なんかバイ。ン。ンの去りかたをしていた。

「ガードマンがくるわ！隠れて！」

アスリンが叫んでるので隠れることにした。二十代はふて腐れてる
が気にしない。

俺はアスリンが隠れているところに隠れた。二十代は青いのに連れ

られて物陰に隠れた。

「あなた、負けて大事なカードを取られるところだったんじゃないの？」

アスリンが五十代に聞いた。

「いや？あの決闘、俺の勝ちだったぜ。」

そう言う五十代は死者蘇生のカードを見せた。

「おい五十代ちょっとフレイムウィングマンみせろ。」

「いいけどなんで五十代なんだよ！！」

「お前がポケ老人のごとく俺が数秒前に言ったことを忘れっからだよ。」

五十代はそう言われて思い出したのか無言でフレイムウィングマンを見せてきた。

「無理だな。」

「なんでだよ！！」

「フレイムウィングマンのテキストをちゃんと読め。このカードは融合召喚でしか特殊召喚出来ないって書いてあるだろ。」

「あっ……」

「自分のカードのテキスト位ちゃんと読んどけ！」

この馬鹿は自分のカードの効果も把握していなかったらしい。
全く関係ないけどアスリン可愛いな。アニメでは嫌いなキャラだったけどこつちの世界では仲良く出来たらいいな。

「今更だが自己紹介をしよう。俺は杉崎美咲だ。」

「俺は遊城十代だ。」

「僕は丸藤翔つす。」

「私は天上院明日香よ。」

「とりあえず今日は夜も遅いし帰ろうか。」

「そうね。ガードマンに見つからないように気をつけなさいよ。」

「じゃあな。美人さん。」

「びっ…美人！？私のこと!?!」

「君以外にいても?」

ギャルゲのようなルートで赤面が見れたな。これは意外と楽しいぞ。
ここはこのまま素早く帰って勝手に深読みさせておこう。
明日会うのが楽しみだ。

さあ寝ようっと。

視点 明日香

なっ… なんなのよあいつ。

突然そんなこと言われても困るじゃない。

気にしないで寝ましよう。

……………

ダメだわ。 あんなこと言われてすんなり寝れないわ。

何なのよ…

第五話「アカデミア入学」さあフラグを立てよう」」（後書き）

今回はギリギリの投稿になってしまいました。

キャラ崩壊している気もありますが気にしないでください（おいおい）
全く関係ありませんがラーのOCG化は来年になるのかな？

最後の明日香のくだりですが何故あんなことになったんでしょう（笑）

ご意見、ご感想、ご指摘などありましたらいただけるとうれしいです。

作者が踊り狂います（笑）
では次話で。

第六話　杉崎美咲の憂鬱（前書き）

皆様、更新をせず申し訳ありませんでした。

冬休みは色々あつて携帯を触れなかったのですが、学校が始まり、余裕が出来たのでこれからはまた更新頻度を戻せと思います。

これからもちよくちよく更新が止まることがあるかも知れませんがマジッ。快斗や冒険王ビ。トの次巻がでるのを待つような気長さでまってください。（あの名作に比べたら落書きレベルの文章ですがwww）

第六話　杉崎美咲の憂鬱

視点…美咲

今、俺はものすごく悩んでいる。

この世界に来たからにはお気に入りのファンデッキを使いたいんだが…

「これ使つと後々めんどくさいことになりそうだしなあ」

そう、使いたいカードが問題なのである。

別にオレイカルコスだのオシリスだのっていう問題ではない。交換してくれ、交換してくれって煩そうなのだ。

「とりあえずどうしても使いたい時に使つて、それで皆にバレたら堂々と使おう」

このデッキ使う様なイベントあったかなあ？

（教室）

視点…明日香

眠い…昨日ちゃんと寝なかったから当然なんだけど。と考えていたら睡魔の原因がやってきた。

「おはよう、天上院。ずいぶん眠そうだな。昨日ちゃんと寝たのか？」

「まず天上院じゃなくて明日香って呼んで。そして眠いのは貴方が昨日、変な事を言ったから。おかげで眠れなかったわ」

「分かった。アスリンと呼ぼう。俺、昨日なんか変な事言ったか？そして俺も美咲でいい。俺が明日香って呼んで、お前が貴方って呼んでたら夫婦みたいじゃないか。」

「夫婦！？いえ、なんでもないわ。アスリンはやめて。美咲は変な事言った自覚は無いの！？」
「どうしよう。顔が真っ赤なのはわかるけど押さえられない…」

「どうした？熱でもあるのか？顔が真っ赤だぞ？ちよっと動くなよ。」

「そう言う和美咲は私の額に手を伸ばして、前髪を持ち上げた？そして美咲の顔が近づいてきて…
自分の額を私の額に重ねた！？
ああ恥ずかしくて死にそう…」

視点…美咲

おう、いい感じに真っ赤になってるな。
まあ狙ってるんだけどね。もう少し明日香弄りを楽しむことにしよう。

「貴方！何を考えているの！？オシリスレッドのくせに明日香さんと呼ば捨てですって？誰の許可を貰ったの？」

「はあ？」

なんかうざったいブルー女子が絡んできた。

「可哀相に、明日香さんこんなケダモノに唇を奪われるなんて！」

勝手にヒートアップされても困る。

「おい？なんか勘違いしてないか？」

「このケダモノ！！オシリスレッドの分際で同意の上だなんて言うつもり！？本当にオシリスレッドは最低ね」

こいつ、流石にイラッときたぞ。

別に十代と仲がいいわけでは無いが、多少は世話になった身である。そして話聞けよ。

こっいうやつは決闘しかないな。

「おい、決闘しろよ」

「オシリスレッドの貴方がオベリスクブルーの私に決闘を申し込むですって？いいわ。叩き潰してあげる」

「「決闘！！！」」

「先行は貴方にあげるわ。」

「ドロー」

美咲…手札6枚

「モンスターをセット。カードを2枚伏せてターンエンド」

「フン！所詮レッドね。私のターン！」

ブルー女子：手札6枚

「畏発動。ダストシユート手札を見せろ」

ダストシユート

相手の手札が4枚以上の場合発動可能。相手の手札を確認しモンスターカード1枚をデッキに戻す。

手札

アトランティスの戦士

奈落の落とし穴

奈落の落とし穴

ギガガガギゴ

ゴギガ・ガガギゴ

古のルール

「ゴギガ・ガガギゴをデッキに戻せ。更にマインドクラッシュ。カード名を1枚宣言しそのカードが相手の手札に存在する場合そのカードをすべて墓地に送る。奈落の落とし穴をすべて墓地に送れ」

「くっ… ハンデスなんて卑怯よ！正々堂々と戦いなさい！」

「ハンデスも立派な戦略だ。海馬瀬戸がウイルスカードを使っている事からもわかる。」

「口ばかり達者なのね！」

私は手札のアトランティスの戦士の効果を発動！デッキからアトランティスを加える！そのままアトランティスを発動！ギガ・ガガギゴを召喚！」

伝説の都アトランティス

このカードは海として扱う。このカードがフィールドに存在する限り、手札、フィールドの水属性モンスターのレベルは1下がり攻守を200ポイントアップする。

ギガ・ガガギゴ

ATK2450↓2650

「ギガ・ガガギゴでモンスターに攻撃！」

セツトモンスター

ライトロードハンターライコウ

「ライコウの効果。お前のギガ・ガガギゴを破壊してデッキからカードを3枚墓地に送る。」

落ちたカード

ワイト夫人

ライトロードマジシャンライラ

おろかな埋葬

「ターンエンド！」

「俺のターン！ドロー！」

美咲…手札4枚

「光の援軍を発動！デッキの上からカードを3枚墓地に送りデッキからライトロードとなの付いたレベル4以下のモンスターを手札に加える！」

落ちたカード

サイクロン

ミラーフォース

ライトロードモンクエイリン

「デッキからライトロードサモナールミナスを手札に加える。」

「モンスターをセットしてターンエンド」

「私のターン！ドロー！私はガガギゴを召喚！」

ガガギゴ

ATK1850 ↓ 2050

「ガガギゴでセットモンスターに攻撃！！」

「セットしていた魔導雑貨商人の効果で魔法、罾カードが出るまでデッキをめくりモンスターは墓地に送り魔法、罾は手札に加える。」

1枚目

ワイト

2枚目

ゾンビマスター

3枚目

裁きの龍

4枚目

ワイトキング

5枚目

ライトロードパラディンジェイン

6枚目

死者蘇生

「よって死者蘇生を手札に加える。」

「ターンエンドよ！」

「俺のターン！ドロー！」

美咲：手札5枚

「死者蘇生を発動！墓地からゾンビマスターを蘇生！更にゾンビマスターの効果！手札を1枚捨て墓地のアンデット族モンスターを特殊召喚する！現れるワイトキング！」

「私のギガ・ガガギゴを蘇生せずにそんな雑魚モンスターを蘇生？所詮オシリスレッドね。」

「その雑魚モンスターにお前は倒されるんだよ！ワイトキングは墓地のワイトキングの数×1000ポイントの攻撃力になる！」

ワイトキング

ATK0↓2000

「更にワンフォーワンを発動！手札を1枚捨てデッキからワイトキングを特殊召喚！捨てたカードはワイトキング！よって2体のワイトキングの攻撃力は3000！」

「レッドはやっぱ馬鹿ね。ワイトキングの攻撃力は墓地のワイトの数なんだから攻撃力は1000よ。テキストを良く読みなさい。」

「お前こそテキストを良く読むんだな。ワイトキング、ワイト夫人は墓地でワイトとして扱うんだよ！」

「そんなの卑怯よ！名前を変えるカードなんて！」

「アトランティス使いながら言うな！バトル！全モンスターで攻撃！！」

「きゃあー！！」

ワイトキングの攻撃がひでえ。

頭骨飛んでくるとかトラウマものだろ…

「今のは無効よ！おかしいわよ！レッドなんか私に私が負けるはず無いもの。」

「やめなさい。ジュンコ！」

「でも…明日香さん呼び捨てにした挙げ句、明日香さんの唇を奪ったんですよ！！許せるはありますか！！」

「おい、お前やっぱり勘違いしてるじゃねえか」

「そもそも私が呼び捨てにしてって頼んだのよ？」

「えっ？じゃあ唇を奪ったのは？どう説明する気？」

「熱を測ってただけだ。つまりはやとちりだな」

「それに美咲に何も卑怯なところは無かったじゃない。それを負けたから無効っていうのは決闘者の誇りに傷をつけるわ」

「その上レッドだブルーだって明日香みたいに実力あるんじゃないけど、女子ならブルーに必ず行けるんだ。自慢できるものじゃないだろ？」

明日香にもお説教されたジュンコは急にしおらしくなった。

「悪かったわね。」

「いやいや、俺も勘違いさせるような事をしたのがいけなかったし」

「いいえ。私がすべて悪いわ。ごめんなさい」

「うん。俺もお前がすべて悪いと思うんだけどね」

「美咲!!」

思ったことを口にしたら明日香に怒られた。

「まあいいよ。今後レッドだブルーだって言わなけりゃ」

「はいはい。皆さん授業を始めるニャー」

先生が来たためそこでその話は終わりになった。

のだが…

「どうしてこうなった？」

「ごめんなさい。美咲。私美咲と決闘して見たかったの」

つまり青いのが覗き容疑で捕まったから助けたければ決闘に勝て。
ってことだな。

「いやだね。俺は別に青いのなんてどうでもいいし。何より俺は眠い」

「逃げるっていうの!？」

「ブルーに負けるのが怖いからって…ずいぶん情けない殿方ですね」

「言っておくが俺は機嫌がかなり悪い。帰すならいまのうちだぞ？
これが最終警告だ」

「帰すわけ無いでしょ!」

「殿方なら潔く決闘してほしいですわね。」

「いいだろう。叩き潰してくれる!」

「「決闘!!!!!!」」

「俺のターン!ドロー!」

美咲: 手札6枚

「突然だがここでルール確認をしたい。勝利条件は?」

「決まってるじゃない!あんたが明日香さんのライフを0にすればいいのよ」

「後はエクゾディアやウィジャ盤などの特殊勝利ですわね」

「それならいいんだ。後から卑怯だの汚いだの言われたくないからさ。待たせてごめんな明日香。俺の睡眠時間を増やすためにさっさと終わらせるから」

「待たされるのは良いけれどさっさと終わらせるつてのは無いんじゃない?」

「悪かったな。じゃあ俺はモンスターをセット。ターンエンド」

「私のターン!!」

明日香: 手札6枚

「私はエトワールサイバーを召喚!」

エトワールサイバー

ATK1200

このカードが直接攻撃するときダメージステップにこのカードの攻撃力は500ポイントアップする。

「エトワールサイバーでセットモンスターに攻撃！」

「セットモンスターは魂を削る死霊！こいつは戦闘では破壊されない」

「カードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターン！ドロー！」

美咲：手札6枚

「翻弄するエルフの剣士を攻撃表示で召喚」

翻弄するエルフの剣士

ATK1400

このカードは攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘によっては破壊されない。

「バトル！！翻弄するエルフの剣士でエトワールサイバーに攻撃！
精 剣 斬！！」

「罨カード発動！ドゥーブルパッセ！」

ドゥーブルパッセ（アニメオリカ）
相手モンスターが自分フィールド上の表側攻撃表示モンスターの攻撃対象になった場合に発動する事ができる。

そのモンスターの攻撃は自分への直接攻撃になる。

その後、自分の攻撃対象に選択されたモンスターで直接攻撃する。

「ならばダイレクトアタックだ！行け！エルフの剣士！！」

「くっ……」

明日香LP4000↓2600

「エトワールサイバーのダイレクトアタック！エトワールサイバーはダイレクトアタックする時攻撃力が500ポイントアップする！アラベスク・アタック！」

エトワールサイバー

ATK1200↓1700

美咲LP4000↓2300

「次のターンに見せてあげるわ。私の切り札を。」

「何を勘違いしているんだ？まだ俺のバトルフェイズは終了していないぜ！！」

「何を言っているの？あなたのモンスターはすべて攻撃を行ったじゃない？」

「速効魔法発動！！狂戦士の魂！」

「何よ！？その物騒な名前のカードは！」

「何よその無茶苦茶なカードは！」

「まず一枚目！ドロー！サブマリンロイドなのでモンスターカード追加攻撃」

「きゃああああ！」

明日香LP2600↓1200「2枚目ドロ！モンスターカード！」

「きゃあああ！」

明日香LP1200
↓
-2000

「ちよつと美咲！？なんで更にドローしようとしてるの！？私のラ
イフはもう0よ！」

「悪いが狂戦士の魂はお前のライフが0になっても効果が続く」

「じゃあせめて優しくして?」

上目遣いの明日香、超可愛い！

「よし。じゃあまとめてやっちゃる。」

ロー！ドロー！ドロー！ドロー！ドロー全てモンスターカード更に
ー！ドロー！ドロー！ドロー！ドロー！ドロー！ドロー！ド
ロー！ドロー！ドロー！ドロー！ドローこれで終わりか。行くぞ明
日香！」

「いいわ。来なさい！」

「精劍斬！ニジュウレンダア！！」

「きゃああああ！！！！！」

「俺の勝ちだから帰らせて貰うぞ。じゃあな」

「おやすみ、美咲。呼び止めて悪かったわね。」

「おやすみ」

こうしてラブレター事件は終わった。

第六話　杉崎美咲の憂鬱（後書き）

どうだったでしょうか？

タッグフォースを見て明日香のカードで狂戦士の魂使えるんじゃないか？と思ったので使わせてみました。

こんな駄文でも読んでくれている人がいるとわかるだけでも嬉しいので感想、指摘、注意等など貰えたら嬉しいです。
では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1830z/>

遊戯王GXに転生したのかな？

2012年1月15日01時52分発行